

地域支え合いシンポジウム 実施報告

- 日 時 令和2年1月20日(月)午後1時30分～4時30分
- 場 所 伊勢原市中央公民館 展示ホール
- 出席者 84名
- 経 過

1 あいさつ

伊勢原市保健福祉部長

我が国は、世界に類を見ないほどのスピードで高齢化が進行しており、本市においても高齢化率は昨年11月末現在で、26.16%（住民基本台帳）となっています。また、一方で働き手となる生産年齢人口は、将来的に減少していくことが見込まれており、今後、高齢者世帯や一人暮らし世帯、認知症高齢者の増加、社会保障制度の維持、介護人材の確保など、様々な課題が懸念されています。

このような社会状況の中、誰もが安心して暮らしていける地域社会を築いていくためには、高齢者同士、また地域住民とのつながりなど、人と人との絆やふれあい、そして「支え合い」が重要であると考えています。本日のシンポジウムでは、その「支え合い」をテーマとし、人生100年時代を迎えるにあたり、改めて皆様が、地域のつながり、支え合いについて考えるきっかけづくりの場にしていただければ幸いです。

2 資料確認等

介護高齢課 地域包括ケア推進係

本市の概要として、高齢化率、日常生活圏域、地域包括支援センターについて説明。また、今後、高齢者を取り巻く状況として、生活支援サービスの不足、介護保険料の引き上げ、介護人材の不足を挙げ、そのような中で取組を始めた事業の一つとして「生活支援体制整備事業」があり、事業の核となる「生活支援協議体」、「生活支援コーディネーター」について、その内容と本市の取組状況について説明を行いました。

3 講演

「人生100年時代を生き抜くための地域の支え合いとは!？」
～「つながり」と「備え」のあるまちづくりのススメ～
特定非営利活動法人 よこはま地域福祉研究センター
副理事長・センター長 佐塚 玲子様

現在、日本の平均寿命は世界でもトップレベルであり、ついに「人生100年時代」に突入しました。江戸時代の日本では、次の時代まで自分の一族を残せるような教育・しつけが各家庭で行われ、地域をつくってききましたが、家族が減り、地域とのつながりも無くなってきている今日の日本で、どうしたら安心して、100歳まで生き抜いていけるでしょうか。

今日本は、世界的に見ても未体験ゾーンに突入していると言えます。団塊の世代が後期高齢者となる2025年問題は、単に高齢者の増加だけが問題なのではなく、独

居、夫婦のみ、地域での孤立等、「高齢者の生活状況の変化」にこそ問題があるのではないのでしょうか。例えば、経済的な問題を抱え、介護者・支援者が少ない家庭状況では、虐待の増加も懸念されます。また、高齢者の絶対数増加に伴い、認知症高齢者も増加していきませんが、家庭・地域の見守りもない状況も想定されます。そして、人生の終末期を過ごす場も不足していきませんが、自宅で介護してくれる家族もいないなど、複合的な問題を抱えた家庭の増加が見込まれているのです。

このような状況に対し、重要となってくるのが、まず「地域とのつながり」です。孤独防止のためにラジオ体操の参加者に朝食を提供する取組や介護保険ではできない自宅の草むしり等を行う住民団体など、介護保険制度の狭間に発生する困難を支援する生活支援サービスが広まっています。

「社会参加」は何も大きなことだけを指すのではなく、地域社会で身近な人の役に立つことも含むと考えています。チャレンジ精神とともに「何とかなるさ」の精神を持って、互助で「社会とつながる」いろいろな活動を考えていっていただきたいと思います。また、「つながり」を築くためには、自分が支えられることを拒まない「受援力」も大切な要素となります。

しかし、そのような取組を行う「互助市民」も人口減少に伴い、今後少なくなっていくことが想定されているため、住民の皆さんは、「市場サービス」の知識も合わせ持っておく必要があり、それが「備え」となります。市場サービスの例として、地域のスーパーマーケットのお届けサービスや廃品回収サービス等、様々なものがあるが、サービス付き高齢者向け住宅にホスピス機能や就業機能を備えた施設等、全く新しいサービスもできており、事前に把握するよう心掛けていただきたいと思います。また、もし地域にサービスが不足しているようであれば、皆さんが声を上げて、今の段階から地域でサービスを育てていく姿勢も必要になってくるでしょう。

皆さん一人一人が、「自分の強み」、「課題」を整理するとともに、自身の理想の高齢期ライフを実現するために「備え」、行動と意識を変え、生き抜ける社会を築いていくことが今、求められているのです。

4 取組報告

各生活支援コーディネーター

5名の生活支援コーディネーターから、「地域の概況」（人口、高齢化率、地理的特徴、観光名所、社会資源等）、「高齢者の暮らしの状況」（要支援・要介護者数、介護予防の取り組み、最近気になる高齢世帯の困りごと）、「生活支援体制整備事業の現在」（協議体の取り組み、生活支援コーディネーターとしての取り組み）、「地域の皆様へ」（地域住民へのメッセージ）という内容にて、それぞれ報告を行っていただきました。

5 ワークショップ

「大丈夫？わたしの暮らし、わたしの地域」

～わたしごとから始めるまちづくり～

特定非営利活動法人 よこはま地域福祉研究センター

副理事長・センター長 佐塚 玲子氏

各地域包括支援センター圏域ごとに2グループずつ、合計10グループ（1グループ8～10名程度）に分かれ、生活支援コーディネーター及び地域包括支援センター職員をファシリテーターとし、グループ内にて意見交換を実施しました。時間の都合上、短時間での実施となってしまいましたが、「地域にあったらいいなと思う活動」、「地域の課題と感じていること」について参加者から意見をいただきました。また、最後の発表では、東部地域から、「大田地区は商店が少なく、移動販売があったらいい。」、「老人会、ミニサロンの活動を行っているが活動場所が少ない。」、また「担い手不足を支えてくれるサービスがあるといい。」、「隣近所の声掛けや顔の見える関係性の構築が必要。」との意見があり、南部地域からは、「自分のできることはやるので声をかけてほしい。」、「空き家や大型の商業施設にて何か取組ができればいい。」との意見がありました。また、西部地域からは、「交通の便が課題で、買い物支援サービスがあるといい。」、「組織づくりの担い手不足が課題である。」との意見がありました。

最後に講師より、「今回の貴重な意見は、今後の生活支援協議体でも活用していただきたいと思います。また、現状の生活支援協議体の取組としては、各地域ごとに何をしていくべきかを考える段階にありますが、地理的な特徴を生活支援コーディネーターと地域住民とで的確に捉えることから始め、人口動態や高齢化率などを勘案し、地域の強み、課題、社会資源の整理を行った上で、地域住民とともに、優先順位を決め、明確な目的を持って、取組を実施し、その後に評価を行うといったサイクルが重要であり、是非実践していただきたいと思います。」との助言をいただきました。

6 その他

アンケート実施（詳細は、アンケート結果集計を参照）



開会の様子

講演の様子



取組報告の様子



ワークショップの様子

